

異色の仙台藩家臣

2017.6 戸塚歴史の会 佐藤正喜

2024.1 一部の誤記訂正

仙台藩の歴史・人物に関する歴史書・小説を読んでいて、異色の出自の家臣に遭遇した。実在の人物であることを確かめたときには、その人物についての出自、召出しの時期・理由、一族の事跡や周辺情報を集めてきた。ここに、その一端を紹介する。

【1】軽部氏(軽部隠岐);三迫軽辺堰(軽辺川)を開削した軽部六右衛門の祖

* 仙台藩家臣録では「軽部」表記。人名、地名(堰、川)には「軽辺」表記されることがある。

1) 出自、召出し; 軽部隠岐は加賀の浪人で豊臣秀吉の配下(家臣、家僕)であったが、秀吉の愛妾・「香の前」の付き人として京から従い仙台に移ったと云われる。香の前の仙台移住の顛末は後述するが、慶長10年(1605)、政宗に召出され家格「平士」、虎の間番士で50貫文(500石)。

2) 家系、事跡; 4代当主の元禄7年(1694)、親戚筋の岩ヶ崎邑6代目領主・茂庭恒真(常実)の預かり人(咎人)逃亡の罪による改易に連座し、軽部家は二迫文字の采地を召し上げられ断絶した。軽部家は、その後は世を憚りながらも、公共工事で多大な貢献をなした5代目・六右衛門を初め、現在に至るまで地域の名士として続いている。菩提寺は鹿島台町竹谷の慈明寺。慈明寺住職・浅野恵一氏から提供された、15代当主軽部敏夫氏の従弟・佐藤茂氏が著した「軽部家禄」によって、一族の事跡を概観してみる。

2代目は讃岐常元(次郎兵衛、のち五右衛門)、実は仙台藩奉行家の茂庭綱元五男の常元で軽部家の養嗣子になった。60貫文(600石)に。

3代目は常元の子で常次、太兵衛。

4代目は太兵衛の子で次郎三郎(前は孫三郎)。

軽部次郎三郎は、天和・元禄の頃、治安を任務とする番士として、伯父の岩ヶ崎邑6代目領主・茂庭恒真(常実)に仕えていた。元禄7年、幕府からの預り人逃亡の件で、茂庭恒真(常実)は文字の采地を召し上げられ改易になったが、軽部家も連座し断絶した。

軽部家の古墓地に自然石で無銘の小さな墓石が一基あり、隣に「茂庭殿様から御座った方で尤も大切なお墓である(茂庭の殿様の元から軽部家へ来なさった方の大切なお墓)」と伝承されてきたという。軽部家4代目・次郎三郎の墓石であると知ったのは、後世のことであるという。

* 常元、常次は墓名から明かだが、次郎三郎は(茂庭)常元からの直系ながら無銘の墓石しか残せないなので「茂庭殿様から御座った方」として伝承させたのであろう。

5代目は次郎三郎の子で六右衛門。生年、諱は不詳、およそ寛文六年頃より寛保元年の人で、寛保元年3月11日没、慈明寺に葬る。軽部家墓地に、「南無阿弥陀仏・苅辺六右エ門」の苔むした小墓石がある。5代目ですら「苅辺」の文字でひっそりと葬られたことから、当時の連座の重みを感じさせられる。

* 預り人逃亡の件であるが、旗本京極高規(宮津藩主・京極高国の嫡男)の家臣が罪あって岩ヶ崎領主茂庭大蔵恒真に預け置かれた際に、この者が再度逃亡したのを隠蔽していたことが後で藩庁に露見し、茂庭、軽部両家は共に元禄七年十月采地没収の罪に処せられた。

3) 軽部家に関連する話題

① **軽部六右衛門**といえば、天和年間(1681—1684)に、岩ヶ崎邑主、茂庭大蔵恒真(茂庭分家の伯父)に招かれ、軽辺堰の開鑿に当たった農業土木技師として知られる。

なお、岩ヶ崎滞在中は、現在の茂庭町裏の小路、通称「おかりや」の屋敷に住んだという。

この「御仮屋(客人をお泊めする屋敷)」が、「おかりや」に訛ったものであろう。

そもそもこの軽部堰は、慶長年間に、仙台藩領初代岩ヶ崎城主に任ぜられた**伊達政宗の五男・宗綱**2才の後見役であった国家老茂庭綱元が企画して着手に至らず滞っていた工事であるという。

元禄7年(1694)の茂庭家の改易、軽部家の断絶事件以降、茂庭本家で松山邑主・**茂庭周防**姓元公の招きにより、二迫文字より**鹿島台竹谷**に移住した。

元禄年間(～1704)に、木間塚開拓事業に参画し、今日同部落を貫流する江合堀の源をなす阿久戸の穴洞(潜穴)を開鑿した。

② 軽辺堰について

『宮城の土地改良年報』によれば、三迫川に軽辺六右衛門が軽辺堰を開削したのは、天和4年(1684)とされている。三迫川からの取水口(栗原市岩ヶ崎大水門)から金成までの9.8キロに及ぶ水路で、栗駒、金成、若柳、岩手県花泉の水田を潤した。

今は、取水口近くに施工土木者の名を冠した「**軽部六右衛門広場**」が造成され、季節の花が咲き誇る市民の憩いの場となっている。軽辺頭首工取水口から栗駒岩ヶ崎中心部までの約1.4kmは水環境整備事業との共同事業で「せせらぎ水路」「遊歩道」「駅前広場」などの整備を行い農水省の疎水百選に選ばれている。

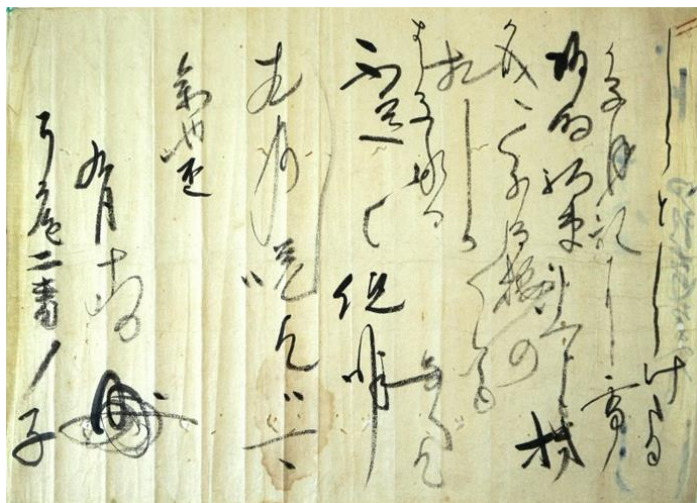
4) 「香の前」の話題

① 天正5年(1577)、京の伏見に居住していた牢人高田次郎右衛門の長女・種として生まれる。

種はその美貌を見初めた太閤・豊臣秀吉の愛妾となり、香の前(香姫)もしくは、お種殿と名付けられた。のち秀吉から陸奥国の大名・伊達政宗に下賜され、政宗との間に慶長3年(1598)に津多(女子)、慶長5年に又治郎(男子)を産んだが、慶長7年に政宗の重臣・茂庭綱元に下げ渡されてその側室となり、2人の子と共に綱元の屋敷に移った。香の前が綱元の側室となった際に、政宗との間に生まれた子供達は綱元の実子扱いとされ、以後は綱元の下で養育されることになった。

娘の**津多**は柴田郡船岡城主・**原田宗資**に嫁ぎ嫡男の**宗輔**を産んだ(この宗輔が伊達騒動で有名な**原田甲斐**である)。息子の**又治郎(又四郎)**は栗原郡清水城に隠居していた前亘理氏当主・**亘理重宗**の末娘の婿に迎えられて**亘理宗根**と名乗った。

*** 香の前が仙台で産んだ津多と又治郎の二人は、政宗の子であると政宗本人が白状した書状。**



令和元年十月 朝日新聞の記事

政宗自筆で又次郎宗根に宛てたもので、九月十八日付。内容は、翌日朝に宗根と会う約束をしたが、気分がすぐれずに難しいというもの。書状の宛先には、確かに「**了庵二番ノ子**」とある。宗根は系図上は、政宗の重臣、茂庭綱元の子どもになっているが、綱元は出家して了庵と名乗っており、了庵綱元の二番目の子という意味では二男・良元とは違う。

書状の最後に、「しらじらとしらけたるかな月影に雪かき分けて梅のはな折る」という和歌がある。筆者は和歌を解せないが、書状を認めた九月の作でなく、「白々と夜明けを迎える雪の朝方にしらじらと白状してしまった」と、告白しているように読めるのである。

②「香の前」にまつわる伝承

最も広く伝わる説話は、はじめ文禄3年(1594)に秀吉が綱元に香の前を与えたが、政宗がこれを綱元から奪ったというものである。当時、綱元は名護屋城留守居役として秀吉との折衝役を務めていたが、秀吉に気に入られて厚遇されており、香の前を与えられたのもその一環であったという。その経緯について『松山町史』では、秀吉が伏見に綱元のための屋敷を下賜しようとしたが、綱元がこれを固辞したため、代わりに香の前を与えたという話を載せ(『伊達世臣家譜』、『高清水町史』では、綱元が秀吉との碁に勝った褒美として香の前を賜ったという話を載せている。

*** 秀吉が愛妾を賭けた囲碁対局の相手が綱元であったこと、その行司役が京都寂光寺塔頭・本因坊の僧で、後に江戸幕府から俸禄を得た**囲碁家元の本因坊算砂**であることを、ある雑誌でみつけた。一次史料はなく信憑性は不明だが、事実とすれば味付けになる話題である。**

また秀吉の碁の相手は伊達政宗で、政宗が碁に勝った褒美として香の前を秀吉から賜わり、その間に儲けた子供を、茂庭綱元の子ということにして、亙理家の養子となしたとする説もある。

綱元と秀吉の親密な関係は政宗の疑念を招き、翌文禄4年(1595)に綱元は政宗から強制的に隠居を命じられ、これに憤った綱元は伊達家から出奔している。結局、綱元は慶長2年(1597)に赦免されて伊達家に復帰するが、『高清水町史』では、この時に綱元が香の前を政宗に献上して自らの屋敷の別棟に住まわせ、そこに政宗が通って津多と又四郎が産まれたという話を載せている。

③仙台移住後から晩年まで

慶長8年(1603)に政宗の五男・伊達宗綱(卯松丸)が生まれると、綱元はその後見役を命じられ、宗綱は仙台北下の綱元の屋敷で養育されることになった。宗綱は居城として栗原郡**岩ヶ崎城**を与えられていたが、城の管理は綱元によって行われ、城下には綱元の家来が居住した。浄土宗の熱心な信徒であった香の前は、慶長17年(1612)に綱元に願い出て茂庭町に**円鏡寺**を開基したほか、同年には**猿飛来に青雲地藏堂**、**稲屋敷に阿弥陀堂**を建立し、翌慶長18年には**大崎八幡宮に金灯籠を奉納**している。

元和4年(1618)に宗綱が16歳で病没すると、綱元は供養のため入道して高野山に赴くことになった。この時、既に重宗から正式に所領を譲られて**高清水城主**となっていた宗根は、母親香の前を自らの居城に迎え入れ、これ以後、香の前は高清水の宗根の下で余生を送った。

寛永17年(1641)死去。享年64。

宗根は明暦2年(1656)の17回忌にあわせて香の前の墓所に安楽寺を開基し、亙理氏の菩提寺としたが、安楽寺は宝暦7年(1757)に亙理氏が佐沼城へ転封された際に共に佐沼へと移っており、残された伽藍には新領主の石母田氏に随って移って来た福現寺が入り、現在に至っている。

④香の前の人となり

仙台に移ったお種は『香の前』と称された。お種は梅の花の香りをこよなく好んだためとか、文化の中心京都に暮らしたお種は「香道」を嗜み、仙台へ移る際に沈香や白檀などの香木、丁子や安息香などの香料を待ち込み部屋でたいていたため、いつしか『香の前』の名が生まれたなどの諸説が

ある。何れにしても、お種は生来の美貌と艶美静淑な立ち居振る舞い、そして雅な京言葉と相まって『香の前』と称されるに相応しい女性であったとか。

【2】和久宗是、是安父子；豊臣秀吉、秀頼の右筆から転身

1) 出自、召出し；

- ①和久氏の先祖は、和久掃部頭なる者で室町幕府に仕え、後に三好氏に属した。
掃部頭に男子なく河合某の子、又兵衛宗是を養嗣子とした。
- ②又兵衛宗是は、剃髪して宗是入道又は自庵と称した。
三好氏、足利將軍家、織田信長、豊臣秀吉に仕え、秀吉亡き後は元和2年、政宗公に請われて仙台へ。元和5年に家格「着座」、2000石。黒川郡大谷村(大郷)に知行地。
大坂の陣が勃発すると太閤報恩の念から政宗公の許しを得て参戦し討ち死した。
- ③宗是には二人の男子がおり、
 - ・長男・又左衛門宗作は多病ゆえに廃嫡。二男・半左衛門宗友が家督を継ぐ。
宗作は別家を興し、子の是信に継がせた。是信は初め豊臣秀吉へ出仕。元和年間(1615－1624)、仙台藩忠宗公に仕え、【仙台藩平士 200石、和久氏】となる。
 - ・二男・半左衛門宗友(是安)は、初め豊臣秀頼に仕え、大坂の陣のあと、伊達政宗公に招かれ元和3年(1617)仙台に。伊達家右筆として【仙台藩着座、1000石】に。
領地は栗原郡沼倉村で、田宅、家中舎(住居、家臣長屋、田圃)を置いた。
二人の子、信是、信安、・・・と、最終 377石。明治維新以降は沼倉村に住み現在に至る。
沼倉村(現・沼倉河子田)、鶯沢村半戸六(現・南郷半戸六)に分家が健在である。

2) 家系；現在の和久氏

- ①仙台には、宗是の長男を祖とする別家がある。少なくとも明治4年元鍛冶町に住んだ9代当主が確認された。仙台市若林区荒町35 日蓮宗・仏眼寺に、是安の墓がある。
仙台別家の墓は未確認。
- ②栗原市には、沼倉に本家、分家が沼倉、鶯沢(南郷半戸六)にある。
本家の子孫は13代の夫人までは確認できたが、14代以降は不詳。
10代当主安通は明治期に村長。
12代当主安正は北海道に移住したが、後、帰郷し酪農組合長、村会議員。
分家の子孫は何れも4代までは健在を確認できたが、5代以降は不詳。
 - ・沼倉の分家当主は村会議員、公民館長などを歴任。
 - ・鶯沢の分家当主は、初代が小学校開設に仙台から招かれ、3代まで教育畑。
3代の和久日出丸氏は昭和44年まで教師、学校長、後、鶯沢町教育長。
(昭和30年代、筆者の岩ヶ崎小学校在学時の校長)

3) 伊達政宗と和久氏との厚誼

- 和久宗是；又兵衛。天文4年(1535)～元和元年(1615)、5月7日 大阪夏の陣で戦死。
初め三好氏の臣。三好三人衆に従っていたが、元亀元年(1570)、三好氏とともに信長に降参(尋憲記)。その後、秀吉に仕え、右筆を務める。

①秀吉時代、天正の末期、小田原北条征伐の号令に反して最後まで参陣しなかった政宗に対して、宗是は親身のアドバイザーとしての役目を果たした。政宗に書状を以って諫めの文(「大物では貴殿を除いて皆が参陣していますぞ!」という位の言葉)を発したと思われる。更に、使者として仙台の政宗の元に出張り説得したという。片倉小十郎景綱の説得もあり、小田原参陣を決めた(天正18年8月6日付け、宗是よりの書状あり)。

政宗は遅ればせながら小田原に馳せ参じたので、箱根の底倉という崖下の地に2、3日留め置かれたけれども面会が叶い、石垣山に築いた一夜城を見ながら「連れション」までした政宗の肝が据わった対応が功を奏したのか伊達家は安泰であった。

政宗の奇抜な白装束での面会など、秀吉をして「愛いな奴よ、上手く使えばわしにとって運命的な助っ人になるかもしれぬな」と、思わしめたか。

②天正19年1月、葛西大崎一揆が勃発すると、宗是より「政宗、一揆同心(旧葛西大崎家臣を扇動している)との蒲生氏郷の疑いを晴らすべく上洛すべし」との書状が到着。

宗是は、審問事項を予め知らせるとともに、氏郷の書状を写し取り同封するなど、秀吉の右筆の立場を超えて情報を提供してくれた。

そのお陰を以って、2月に上洛し、「花押の針穴の有無」で秀吉を納得させて岩手沢に帰城し、政宗は一揆討伐の戦いに集中した。

③慶長3年(1598)秀吉が死去。慶長5年の関ヶ原の戦いで宗是は西軍に参加し、関ヶ原浪人となった。関西、関東に隠れ棲むこと12年、慶長17年(1612)宗是77才のとき、政宗が仙台に招いた。公儀から見つかり難く、仙台に近い黒川郡大谷邑に2千石を与え、同邑川内御成沢に屋敷、草庵を構えて少ない数の中間、小者と住まいしたという。

④慶長19年、大阪冬の陣を前にして宗是は「大恩ある豊臣の為に死にたい」と政宗に願い出た。政宗は宗是から受けた恩義、宗是との親密な関係を思い許しを与えた。宗是は翌年夏の陣81才、天王寺、岡山決戦に臨み、甲冑を脱ぎ白綾を着て、兜を被っただけの軽装で槍を手にし単騎で徳川勢へ突入し戦死したと伝わる。

○和久是安;半左衛門宗友、天正6年(1578)～寛永15年(1638)

和久宗是の子(半左衛門宗友)、摂津大坂で生まれる。近衛信尹の門弟となり三藐流書道の奥義を極めた。豊臣秀吉・秀頼に仕えて祐筆となり摂津太田郡に領地。

①慶長19年(1614)年10月、大阪冬の陣を前にして、政宗は白石を出立して15日、下野小山にて大坂方豊臣秀頼の使者和久半左衛門宗友(是安)に出会った。宗友は「政宗から家康、秀忠両御所へ執り成して救って欲しい」旨の秀頼公の依頼状を持参した。徳川が示した三か条(大坂城明け渡し、秀頼公の江戸参勤、淀君を人質に出す)の何れかを承諾せねば会戦にならざるを得ない状況のもとで、秀頼公は政宗による弁護・赦免を依頼したのである。

政宗は、徳川方出馬の途上であり、宗友の父・宗是から受けた恩義から、宗友を抑留或は処分せず、家臣を副えて箱根まで送り返す措置をとった。宗友は、関所を出たところで徳川方によりそのまま伊豆三島代官に預けられ拘置されてしまう。

②政宗は宗友釈放に奔走した。『貞山公治家記録』から記事を拾ってみる。

- ・11月、山岡志摩に命じ、宗友の処置を本多上総介正純から大神君家康に言上してもらう。
- ・元和元年(1615)5月、山岡志摩を土井利勝の許に遣わし、宗友の詫言について申し入れ、「何様にも疎略無き由申さる」と、好印象の返状が来た。

・大坂落城後、5月末、宗友に父・宗是の討死を悼む書状を送る。帰国の途、8月伊豆三島に止宿、この地に拘置されている宗友に書状を送る気遣い。

③仙台にて元和2年(1616)5月、和久宗友の赦免が実現し、政宗に賜う旨の本多上総介正純・土井大炊助利勝の書状が到来。宗友赦免問題は家康の死により解決した。

④秀忠の許しを得て伊達家の家臣となり仙台に来たり、**家格「着座」**に列し千石を与えられ栗原郡沼倉邑に住んだ。宗友(是安)の頃、田宅1区(邑主館と田圃)、家中舎17区(家臣、中間、足輕の長屋17軒)を設けた。★着座の家格;正月の儀式などで着座して藩主に挨拶のできる家臣。

⑤寛永15年(1638)、病気で死亡。享年61。栗原郡宮野村の妙圓寺に葬られた。

⑥和久家の藩役職;『伊達世臣家譜』より記載。

・初代是安は政宗公の右筆、忠宗公の書道の教授を勤めた。4代目・白安が武頭、脇番頭を勤め、その後の歴代は、近習、城番、武頭、脇番頭を勤めたようである。

和久半左エ門是安「君が代」⇒



○和久是信;是安の兄・宗作の嫡男。仙台における別家である。

和久宗作の子。父・宗作は病気のため家を継ぐことが出来ず、是信が和久家を相続した。

豊臣家に仕えていたが、大坂夏の陣で城が落ちると縁を頼って伊達政宗のいる仙台に落ち延び家臣となり、虎の間番士に任ぜられ200石を与えられた。【伊達世臣家譜;平士】

・墓は、仏眼寺(仙台市若林区荒町 35)にある。

【3】柳生氏(柳生権右衛門);大和の柳生石舟斎宗厳の孫、尾張柳生利厳の弟

1)出自、召出し;『伊達家臣録』による…延宝5年の『御知行被下置御帳』が原本。

父・柳生新次郎厳勝は石舟斎の嫡男、その三男が権右衛門。諱は厳重、厳倚とも。

長兄・久三郎(1577-1597)は豊臣秀吉の朝鮮出兵で戦死、次兄・利厳兵庫助(1579-1650)は尾張柳生初代。権右衛門の生年は不明であるが、兄弟の生年から1580年初頭の生まれか。祖父・石舟斎より柳生新陰流の印可を受けたという。

元和2(1616)年、権右衛門、伊達政宗に召出し600石。

土御門左衛門佐久脩(徳川家康の公家昵懇衆)の紹介とある。

豊臣家滅亡後の召出しであるが、権右衛門の大坂の陣参陣の有無は不明。

仙台藩主伊達政宗は幕府において権右衛門の叔父・柳生又衛門宗矩(当時、家康の兵法指南)と親しく、自身の兵法指南として柳生又衛門宗矩に推薦を依頼したのであろう。

1580年生まれと仮定すると36才頃の出仕になる。2代目権右衛門の延宝5年(1677)の藩への身上書によれば、「亡父権右衛門に嗣子がなく、拙者、伊藤喜兵衛二男を嗣子・権右衛門とし、10才より奥小姓として仕えさせた」とある。「亡父権右衛門は寛永8年(51才頃)病気がちで奉公が叶わず、寛永11(1634)年、拙者権右衛門、20才にて亡父権右衛門名跡を仰せ付けられた」という。

これから2代目権右衛門は、実父が伊藤喜兵衛で、元和元年頃の生まれと推測される。

実父については、「拙者実父・伊藤喜兵衛は加賀肥前(前田利長公)に仕えていたが、その後は牢人し京都へ引込み…」と記している。

「同 12 年 父、権右衛門病没(相果申候)」とし、55 才頃に亡くなったことを示している。
寛永 12 年といえば、政宗死去(寛永 13 年)の前年である。その後、「義山公(忠宗)の代には
770 石に増禄なった」ことを記している。延宝 5 年に身上書を申告した頃の 2 代目は 62 才。

＊柳生権右衛門が政宗に召出され(1616)、政宗の死去(1636)までの間、政宗の兵法指南だ
ったとされるが、宮城県史、仙台市史、他の検索史料には記載がない。

約 20 年間、政宗個人の兵法指南として、病気がちな体質で緩やかな生活を許されたとすれ
ば納得できることではある。

2) 家系;『伊達世臣家譜』による……家祖から明和(1780 頃)に至る家系を編纂。

「柳生権右衛門厳勝が元和 2 年(1616)、伊達政宗に召出され 600 石、郡司を務め、のち 700 石。
紹介者土御門は 1)の家臣禄と同じであるが、「後に故あり減俸、火災により家譜焼失……………
厳勝次男柳生新次郎厳重を以って祖とし、その末裔は虎間番士、100 石。……………」と、あるが、
以下の点が史実に合わないので、ここでは転載しないことにした。

- ・柳生石舟斎宗厳の嫡男は新次郎厳勝、その三男が権右衛門厳重。完全な人違いであろう。
- ・新次郎厳勝は、1572 年に腰に銃弾を受け負傷し身体が不自由になり、元和 2 年に死亡。

同年、政宗に出仕したとする家譜はおかしい。出仕したのは権右衛門厳重である。

- ・権右衛門厳重は寛永 19 年、忠宗公の時代に無禄の小姓で出仕。権右衛門厳重に男子なく
小平太郎左衛門元威二男が継いで権右衛門元常と称し、長じて武頭、不断頭を勤め 300 石
とある。権右衛門厳重の出仕時期が全く合わない。実父が 1)では伊藤喜兵衛、ここでは小平。

★『宮城県姓氏家系辞典』の記述も、

「柳生権右衛門厳勝の次男新次郎厳重に始まる一家。平士、100 石。厳勝は元和 2 年(1616)、伊
達政宗に召出され 600 石、…」として、『伊達世臣家譜』に拠っていることが分かる。

★明治まで続いた柳生家として、

厳重＝元常(小平家二男)―厳弘―厳孝―厳覃―厳智＝厳元(厳智弟)―厳英―庫次郎
がいるという。厳智は文化 10 年家督相続、厳英は明治 4 年、東 7 番町南町通角に住み、その
嫡子が庫次郎であるという。

★幕末の藩士名に「平士(大番組)100 石、柳生権五郎」の名が見える。

3) 仙台藩の新陰流

延宝 5 年(1675)に柳生宗矩の門弟、狭川新三郎助直が来仙した。

新陰流狭川派が伊達家の「御流儀兵法」になる。

新陰流狭川派には、狭川新三郎助直、狭川喜多之助助克がいた。

【4】柴田外記;長宗我部元親の外孫、仙台藩柴田家養嗣子

1) 出自;慶長 14 年(1609)生まれ。

長宗我部盛親の重臣佐竹藏人親直と、長宗我部元親の三女阿古姫との間に生まれたのが
後に柴田外記朝親(初名)となる佐竹仲三郎(幼名)である。

大坂夏の陣では、長宗我部盛親軍と藤堂高虎軍が衝突した八尾での戦が激烈を極めた。盛親は

一応この戦には勝ったものの、双方とも多くの家臣を失った。その中には、佐竹蔵人親直もいた。仲三郎は、母、兄と共に父の蔵人について大坂城に籠城していた。このため敗戦が色濃くなって、大坂夏の陣の戦乱の中を母子は逃げ惑う中で、伊達政宗の陣営に捕らえられた。

伊達政宗は興味を持って、この母子に面会し仲三郎の面構えと素性に興味を持った。仲三郎は幼少とはいえ、勇名をとどろかせ豊臣秀吉軍とも戦った土佐の長宗我部元親の孫である。なかなかの覇気を漂わせていたようだ。この時仲三郎はまだ7才ほどであったという。

伊達政宗は織田信長亡き後、豊臣秀吉、徳川家康らと争って、天下をにらんでいた。この仲三郎の長宗我部家は、関ヶ原以降の政策の舵取りのつまずきから、家はもろくも崩壊していたものの、四国全土を統一して、一時は天下を望むことが可能な位置にまでつけたこともある。政宗はその長宗我部元親の孫とあらば、伊達家で、一命を預かるのも「一興」と判断したのであろう。また、一方で政宗は、そうした無理を徳川家康に押し通す力も持っていた。

長宗我部家は、大坂の陣に冬夏ともに、二代目当主の盛親が出陣している。徳川方からいえば、敵である。その血筋である仲三郎だ。通常であれば家康の前に差し出すのが、道理であろう。だが、政宗はそうはしなかった。政宗流を通したのだ。「長宗我部元親公の孫を預かり申した。ついては、まだ幼少ゆえ、当家にお任せいただけないか」との趣旨の申し出を家康に出してみたのだろう。

伊達政宗からの頼みとあれば無碍にも断れない。それに、大坂夏の陣で、豊臣家の二代目秀頼は23才の若さで自刃してしまった。家康は、もつとも危険なものは取り去った。後は、当の伊達家、上杉家、毛利家、島津家など、残る外様の有力大名らをコントロールしながら、その力をいかにそいでゆくかである。今は、まだ伊達家と争う時ではない、との判断が働いたのであろう。

こうして、元親の外孫・仲三郎の一命は守られた。仲三郎は仙台の伊達政宗の下に連れてゆかれて、大切に育てられることとなった。仲三郎は、のち故郷の土佐上賀江に因んで**賀江忠次郎**と改名している。

政宗は仲三郎のみではなく、その母・**阿古姫**も大切に保護したようだ。『柴田家歴代略記』には「仙台御本丸ニヲイテ**柴田宗義**ノ娘於山殿ノ部屋ノ次ニ部屋ヲタマハリ政宗君御相伴ニ被仰付名ヲ中將ト被仰付」とある。柴田宗義は仙台柴田氏初代、於山殿はその娘で**柴田氏**ともいい、政宗側室で、岩ヶ崎6代城主・**宗信の生母**である。本丸の於山殿の次に部屋をもらい、(阿古の)中將と名付けられて寵愛を受けた、とある。

政宗の重臣、柴田氏4代の米谷城主・**柴田宗朝**は、寛永5年(1628)、嗣子なく死去する(享年20)と、異父妹を賀江忠次郎に配して柴田氏を相続させた。柴田氏5代**柴田外記朝意**と名乗る。

2) 召出し;

母・阿古姫が侍女として本丸に部屋をもらった頃から、兄・元成と仲三郎の兄弟は小姓として政宗に仕えた。成人して柴田氏を継いだ柴田外記朝意は、家格「一家」の主として米谷城を預かり、政宗をはじめ、忠宗、綱宗の三代に亘って仕えた。

兄・元成は後に、絶えていた五十嵐信濃の名跡を再興した。すなわち、「**五十嵐蔵人元成**である。船岡・大光寺の柴田家墓地に元成の供養碑がある。寛文4年没。」……柴田町史

3) 柴田外記朝意の事跡

忠宗公の時代 正保元年(1644) 国番頭、同3年 江戸番頭

綱宗公の時代 万治元年(1658) 江戸留守居、
 綱宗公押込め後の同3年奉行に新任(53 才)、4,150 石。筆頭の奥山が権力を掌握していた。
 寛文元年(1661)以降、綱宗の後見人**伊達宗勝**(政宗 10 男)や**田村宗良**(綱宗兄)と、仙台藩との関係を巡って、奥山と両後見人が対立した。さらに一門の**涌谷伊達氏**(伊達宗重)や奉行の富塚らの要求により、奥山は寛文3年に失脚する。こうして、仙台藩騒動(寛文事件)に突入した。

4)家系;5 代外記朝意以降の当主

6代;宗意 寛文11年 父の死で家督相続、35 才 奉行職を拝命。元和元年 船岡に所替え。
 貞享元年 加増 5,150 石。宝永3年 没。

7代;宗僚 貞享 4 年 貞山公年譜の編集従事、元禄 8 年 33 才奉行職、甥を家嗣に、9年没。

8 代;宗理 元禄 9 年 家督相続、正徳 2 年 35 才奉行職、元文 4 年没。

9 代;朝隆 享保 15 年 28 才大番頭、宝暦 4 年 没。

10 代;成義 宝暦 4 年 25 才で家督相続、奉行職、寛政 8 年 没。

11 代;意定 安永 8 年 病身の父に代わり奉職、祭祀奉行、小姓頭、天明5年若年寄。

12 代 親友、13 代 意利、14 代 意広(養子)、15 代 意成;明治2年、3 才で亘理伊達氏(伊達邦成)を頼り、家中123名とともに北海道に移住(伊達市)、と続いた。

その後は、18 代の当主(外記朝意から 14 代)が宮城県柴田町に健在である。

5)寛文事件と柴田外記朝意

事件当日、拔刀して涌谷氏(伊達安芸)に切りつけた**原田甲斐**を見て柴田も拔刀、原田の肩と胸を斬ったが、自身も返り太刀を受けて額を負傷した。江戸留守居役蜂屋可広の加勢を得て原田を討ったが蜂屋も重傷。朝意は駆けつけた仙台藩医・福井玄孝や家来らに急いで自分を仙台藩縁戚の**宇和島藩伊達家**の屋敷に運ばせるが、間に合わずに息を引き取った。享年 63。

故人の意思を重んじて、表向きは同日夜に蜂屋と共に宇和島藩邸で死亡したことにされた。翌日、荏原郡桐ヶ谷村の霊源寺で荼毘に付され、4 月 13 日に遺骨が米谷へと到着し、菩提寺の大光寺に埋葬された。

(記録によれば柴田外記は切られた後も息があり、翌日亡くなっているのだが、息が絶えるまで酒井大老の屋敷から出されなかった、とも云われる。)

★酒井邸での刃傷は、伊達家の関係者が落命したので真相は不明であるが、大正10年に**15代当主伊達邦宗**が著作した『**伊達家史叢談**』巻ノ六、429頁以降に、「寛文事件」が掲載されている。
 下線部は筆者の意見・感想である。

①「世にいう仙台騒動と称するが、我が家最大の不幸事であり、憚りながら仙台騒動と言わず、寛文事件というものなり」とし、「正を正とし、邪を邪とし、公平無私の心で述べ、事実でないものは訂正し、針小棒大の事実は誇大を訂正し、後世に誤りを伝えないようにすることを目的にした」と前書きした上で、兵部、甲斐、渡辺金兵衛を悪者として次のようにこきおろしている。

・「兵部伊達宗勝君は実子市正に大老酒井忠清の娘を娶り、この縁で酒井侯の威を着て驕慢を極め、苛政甚だしく、原田甲斐等の姦臣を登用し、結託して姦策を弄している」

・「渡辺金兵衛義俊という小吏は姦物にして悪智恵を以って伊達宗勝君に可愛がられ抜擢されて監察となり、遂に扈從頭に昇進した。宗勝君も彼を無二の者と思い込み、……、迎合する者を重用し、正義を守る者を退けることで、殆ど意のままに独断専横している」。

このように、身内の兵部を断罪しながらも、原田甲斐を姦臣と決め付けている点、事件から250年経た時点でも、伊達家にとって真相は分かっていることになり、筆者の驚きであった。

②事件当日(寛文11年3月27日)の記述に、「大老酒井……列席のところに、我が一門伊達安芸、国老柴田外記、同原田甲斐、同古内志摩、公儀使蜂谷六左衛門を召され、逐次問うところであつたが、遂に甲斐が答えに窮し、安芸の後を通ると見せかけて拔刀して安芸を刃傷し、安芸も甲斐に斬りつけたが命を断つに至らず、また甲斐の斬り付けに会い遂に死んだ。外記も六左衛門も傷を蒙ったが、甲斐が為したのではなく、大老の家人が狼狽の極みから兩人に討って出たものであつた。伊達宇和島公が大老に請い、外記、六左衛門を引き取られたが、即日外記が死に、六左衛門は翌日逝った。」… 甲斐を斬った酒井家臣に触れていない。志摩はどうしたのか？

③兵部の処分の記述に、「4月3日宗勝君を松平土佐守に拘禁し……、甲斐を狂暴に至らしめたのは兵部の罪なりとし、宗勝君の禄を伊達家に返し賜る」とある。… 真相は伊達家では分からない。

【5】真田氏(真田幸村の次男・大八);仙台真田氏の祖(真田守信)

1) 出自、仙台に来た経緯

父・真田幸村(信繁)、母・大谷氏、慶長17年(1612)、九度山生まれ。寛文10年(1670)没。慶長20年(1615)5月7日、大坂夏の陣において父真田幸村は徳川家康本陣に突撃をしかけるも、果たせず討死した。その前日の5月6日夜、幸村は、大坂城内に入城させてあつた三女阿梅(おうめ)を、敵方である伊達政宗の重臣、片倉小十郎重綱のもとにひそかに送り届けた。大坂落城の後、伊達政宗の軍勢はいったん京都に駐屯(5月9日～7月23日)。ここでまた重綱のもとに、幸村の遺臣三井景国の家臣我妻佐渡、西村孫之進に護られながら、幸村の六女おかね、七女阿菖蒲(おしょうぶ)、八女(名前不明)、そして次男大八(4才)が送り届けられた。7月23日、幸村の子女5名は伊達政宗の軍勢に匿われる形で京都を出発、江戸を経て仙台に到着した(9月5日)。

仙台到着後、子女たちは片倉重綱の保護を受け、4人の姫は白石城内にて養育された。後、三女阿梅は片倉重綱の後室(後妻)に、六女おかねは京の茶人石川宗雲に、七女阿菖蒲は三春城主田村氏の末裔である片倉定広(この当時は伊達家臣となっていた)に、それぞれ嫁いだ。

一方、幸村の次男大八は名を片倉久米介と改め、片倉氏から一千石の食客禄を与えられて客分として白石城外で養育され、元服後は片倉四郎兵衛守信と名乗った。

★以上から、阿梅(おそらく侍女付き)は大坂城炎上の直前に片倉陣前に密かに送り届けられ、次男大八を含む姉弟4人は、京都駐屯(5月9日～7月23日)の間に、幸村の遺臣三井景国の家臣我妻佐渡・西村孫之進に護られて送り届けられ、先に届けられていた阿梅と合わせて5名が、京都を出発して仙台に向かったということであろう。

仙台藩重臣(家格・一家)の片倉家文書『老翁聞書』に、この経緯が記されている。

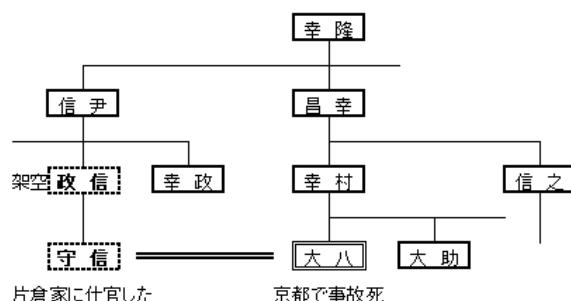
「大坂落城の砌、城中より年の程、十六七許りの容顔美麗なる女性白綾の鉢巻し、白柄の長刀を杖つきて、重綱公の陣先へ出しけり。重綱公之をつれ帰りたまいて後室とす。誰人の息女たることを語らず。其の所行凡ならず、太閤様の御息女にもあらんかと、とり々々の沙汰なり。

後その家来のもの尋ね来りて臣下となる。真田左衛門佐幸村の息女とす。

寄手諸将の中に片倉兼ねての英名、殊に此の度目を驚かす、武功の事なれば末繁昌ならん事を豫め斗り、容色萬人に勝れたる息女なれば、捨てたまふべきにあらずと幸村申し置き、重綱公の陣の前へ、差し出したるならんと、皆いへるけりとなり」。

2) 片倉家係累として育てられた大八【仙台真田家初代、真田守信】

元服後は片倉四郎兵衛守信を名乗り、寛永元年(1624)の頃、仙台藩は、高野山蓮華定院及び松代藩真田家に「大八君 8 才の折り、京で印地打ち観覧中に石に当たり他界」との偽情報を流し、同時に系図を偽造し幸村(信繁)直系であることを隠した。即ち、徳川方に仕官している幸村の叔父・信尹(旗本 5 千石)に**政信**という架空の息子を設定し、その息子(信尹の孫)守信が片倉家に仕官したということにしたのである。



偽系図



真田四郎兵衛守信肖像

寛永 17 年(1640) 29 才、**真田四郎兵衛守信**を名乗り仙台藩士、家格・永代召出し二番座に。同じ頃、幕府は、大八、守信の調査、明石全登の息・内記(仙台藩一時保護)の捕縛を命じて来た(若年寄時代の知恵伊豆こと松平伊豆守が関係した命令)という。

幕府には先に打っておいた大八事故死の情報と偽系図を示し、守信は、早くから家康に臣従していた信繁の叔父・**真田信尹**の孫であると報告して逃げ切った。同時に藩に願い出て片倉姓に戻す。江戸御番組馬上役、江戸留守居、武頭など歴任。33 才で刈田郡矢付村(現蔵王町)、栗原郡一迫郷八沢村に領地、石高 360 石。食客禄千石は返上。仙台五橋に屋敷を拝領、間口は千石取り級。

万治2年(1659)、守信は田村宗良の「御目見得時服拝領」の御礼使者として江戸に向かい、老中に会って仙台に戻ってきている。守信の出自を気にしていた松平信綱はまだ現役であったが、特に問題は起きなかったようだ。守信の結婚は遅かった。52 才にして五十嵐氏の女を正妻を迎えた。正妻の父・**五十嵐藏人元成**は旧姓を佐竹といい、母は長宗我部元親の娘である。【4】で紹介した旧姓佐竹仲三郎、後の**柴田外記朝意**の兄である。大坂方の残党である真田氏と長宗我部氏は、時を超え仙台の地で縁組をしたのである。

寛文 10 年(1670)没。享年 59。墓は姉・阿梅と同じ当信寺。

死ぬまで真田姓に復帰叶わず。

守信の墓石の頂部には仙台真田家の家紋「結雁金」でなく、「一文銭」が刻まれている。当時の立場からすると、「六文銭」を刻むことができなかったのであろう。また、墓碑には幕府からの家系調査の際に名乗っていた「四郎兵衛」と刻み、一文銭を掲げることで「我こそが真田幸村の男子である」という意味を込めたものであらうと考えられる。



真田守信の墓

実はこの墓碑、現在、当信寺本堂の裏に姉・阿梅の墓碑と並べられているが、昭和 17 年までその所在が不明となっていたという。墓地整理のために積まれていた墓石を片倉家 15 代当主が偶然に見つけたものという。幕府に憚り墓石までも過酷な扱いをせざるを得なかったのであらう。

正徳2年(1712)、守信の子・辰信の代で、100 年ぶりに**真田復姓**を許された。

3) 真田守信の家系

以降、真田信繁の血筋を伝える仙台真田家として、分家、他家から養嗣子を4度ほど迎えているが血脈を今に伝えている。現当主真田徹氏は13代目(信繁から14代)で東京に健在である。

①2代目 **辰信**;父・守信の死により15才で家督相続。大番士(城中警備)から江戸御番(他藩相手の外交官)に。4代藩主・綱村公が延宝元年(1673)、松代藩3代藩主・真田幸道を屋敷で饗応したのが契機となり、真田辰信が真田幸道公と面会したことが、松代真田家正史『真田家御事跡稿』に載っている。元禄元年(1688)、仙台藩は幕府の手伝い普請で日光山霊廟の修復を行うことになり、辰信は普請担当として日光に赴いた。元禄3年まで続き、23万両もの大金を費やすことになった。借金も44万両余にもなり、藩は財政難に悩まされるようになり、幕末まで金の問題に振り回されていく。五代藩主・吉村公(大八の姉・阿梅のひ孫に当たる)の時代、正徳2年、藩主からの「將軍家を憚るに及ばざるの内命」があり真田に復姓した。

②8代目 **幸清**;分家からの養子。息子の喜平太に家督を譲った後、安政2年(1855)領地の矢付村で「真田塾」を始めた。明治4年没。矢付村には教え子達が建てた筆子塚が今も残されている。この墓碑には堂々と「左衛門佐幸村十世 真田源太左衛門滋野幸清」と彫られている。これが仙台真田家が真田幸村の子孫であると表だって記した現存最古の記録になるという。

③9代目 **幸敏**;喜平太。洋式兵学者・藩参政。軍政改革実施、戊辰戦争には仙台藩が降伏するまで最前線で従軍した。もとより勤王の士である喜平太は新政府軍と戦うことには反対の立場で、藩主・慶邦と仙台藩への恩義のために戦っていたのであり、仙台藩が降伏するならばこれ以上の戦闘は無意味と思っていたのだろう。戦後、石巻に転居、教育に奉職。県議会に参加。享年64。



現当主 徹氏

4) 真田守信の姉の家系

①片倉小十郎重綱の後室 阿梅

白石城主・2代片倉重綱の正室亡き後に後室に。阿梅は子供に恵まれず、重綱の前妻の産んだ娘が松前安広に嫁いで産んだ長男・三之介(景長)を引き取り嗣子(3代・片倉景長)として養育。天和元年(1681)没。享年78。墓は白石市の当信寺。法号・泰陽院殿松源寿清大姉。虫歯の仏様として信仰され、至るところが削り取られている。



阿梅ノ方御位牌

位牌には六文銭(左右に三つずつ)があしらわれている。

仙台片倉家は家格「一家」、1万8千石、奉行職を勤めた家系で、現当主片倉重信氏は、16代目で青葉神社(仙台市青葉区)の宮司を務めている。

★片倉景長の娘・お松は長じて一門の伊達宗房(田手氏)に嫁ぎ、その子は五代藩主・吉村になる。五代吉村公は片倉重綱・阿梅夫婦の曾孫に当たる。また、重綱は阿梅に先立ち亡くなったが、阿梅は景長の子、4代・村長が家督を相続するまで生きて、片倉家の行く末を見守った。

②片倉(田村)定広の室 阿菖蒲

田村定広は伊達政宗正室・愛姫の一族で、片倉小十郎重綱の伯母・喜多の苗跡を継いでいた。喜多は昔、政宗の養育係で秀吉は喜多の才を愛し「少納言」と賞揚したほどの才女。後、田村定広は片倉金兵衛と改名し仙台藩士、81石4斗で江戸番、のち江戸脇番頭を務めた。片倉金兵衛家の現当主(13代)は、駐イラク大使を務めた片倉邦雄氏。

【6】香宗我部重親;長宗我部元親の甥の養子

1) 出自;長宗我部元親の三弟・親泰は、香宗我部家を継いで香宗我部親泰と称した。

子の貞親は大坂落城ののち、肥前国唐津藩藩主・寺沢広高に養われて中原喜左衛門と称した。中原は先祖の秋家が称した姓という。のち、寺沢広高の死後の 9 才の時に武蔵国に移り、遠戚である春日局の推挙により、寛永 12 年、堀田正盛に仕える。その際、長宗我部一門という出自から、將軍家光に仕官の許可を得ている。堀田家臣として千石を知行。そこで香宗我部に復姓した。

その跡は堀田家の家臣高井源三衛門の子(母は老中堀田正盛の妹)が継いで重親と称した。

父・貞親の死後、養子重親は万治3年の堀田家改易後、仙台に移り、遠戚の仙台藩士柴田朝意を頼り、伊達家に仕官した。

2) 召出し;寛文13年 9 月、4 代藩主・綱村公のときに出仕。番士。

合力小判百両・百人扶持という千石相当の厚遇を受けた。

寛永6年 正兵衛親清 虎の間入り。

3) 家系;

香宗我部重親は、後に堀田正信の招きにより、養子親清(遠山良隆の子)に家督を譲り、妻と共に下総古河へ移った。その跡は、親明—親賢—親房—親苞(大町成頼の子)—親範(茂庭善元の子)と継いで、幕末の藩士(大番組 1,022 石 香宗我部斎)の名がみえる。